

『ゴルギアス』におけるゴルギアスの矛盾

木下昌巳

Masami KINOSHITA

『ゴルギアス』において、プラトンが弁論術（ῥητορικὴ）に対して敵対的な態度をとっていることは疑いえない¹⁾。この対話編では、ソクラテスの対話相手として、順に、ゴルギアス、ポロス、カリクレスという3人の人物が登場する。最初のゴルギアスとの会話においては、もっぱら弁論術を巡って議論は進められる。しかし、その次のポロスとの会話においては、そのなかほどで弁論術は議論の表面から退き、その残りの部分（466aff.）では、正義と幸福の関係という問題に関して意見が闘わされることになる。そして、最後のカリクレスとの会話では、弁論術そのものにはほとんど言及されなくなり、「人はいかに生きるべきか」（500c）という問題が正面に据えられ、議論される。しかし、ポロスやカリクレスとのあいだで交わされる倫理的な問題にかかわる議論は、弁論術と無関係なものではない。彼らが唱道する反道徳的な立場は、プラトンにとって、ゴルギアスの弁論術が内包していた価値観が具現化されたものにはかならない。つまり、『ゴルギアス』におけるプラトンの弁論術批判の戦略は、ゴルギアス、ポロス、カリクレスの三者で議論が受け継がれていく過程におい

¹⁾『ゴルギアス』には、弁論術批判と、正義・不正と人の生き方の関係という二つの主題があるように見える。古代より、このどちらが『ゴルギアス』の「真の主題」であるのかということについて見解が分かれてきた（Cf. Dodds, 1-5）。この問題をどう考えるかを別にして（わたしはこの問題に決着をつけることは不可能であると考え）、プラトンが『ゴルギアス』において、弁論術を批判しようとしていることは否定できないことであるとわたしには思われる。そして、その議論を有意義に解そうとするならば、議論の構造を以下のような仕方で捉えることが不可避である。

て、ゴルギアスが弁論術に関して語った主張のなかから、弁論術が内包しているこのような価値観を暴きだし、最終的にカリクレスとの会話において、その暴きだされた価値観を正面から批判しようとするものであると言うことができる²⁾。それゆえ、『ゴルギアス』の弁論術批判が有効なものであるためには、ゴルギアス、ポロス、カリクレスの三者のあいだにおける移行が、論理的に必然的なものでなければならない。

本稿で焦点を当てるのは、ゴルギアスからポロスへの移行の妥当性である。ゴルギアスからポロスへの移行は、ゴルギアスがソクラテスとの問答において矛盾に陥り、ポロスがその矛盾を構成する一方の主張を放棄するという仕方で進行する。ソクラテスがゴルギアスの主張から矛盾を導きだす議論については、これまでも多くの論者がその難点を指摘してきた。以下の議論では、まずソクラテスが指摘するゴルギアスの矛盾を概観したあとで（I章）、この議論に対していままで行われてきた批判を検討する（II章）。そのあとで、ゴルギアスが主張する「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼに焦点を当てることによって、これまでの論者が指摘してきた問題とはまた別の問題点をあきらかにし、その角度から『ゴルギアス』の弁論術批判の有効性を検討をしたい（III, IV章）。

I

まず、ソクラテスがゴルギアスの主張のなかに指摘する矛盾を概観しておくことにする。ソクラテスは、弁論術はどのような技術であるのかという質問に対する一応の答えをゴルギアスから引きだしたあとで、あらためてゴルギアスに対して以下のような質問をする。

「いったい、弁論家というものは、正と不正、美と醜、善と悪といった問

²⁾Irwinは、『ゴルギアス』の議論を次のように構造化する（Irwin, p.9）。（G, P, Cはそれぞれゴルギアス, ポロス, カリクレスを指す。）

1. もしGなら, Pである。
2. もしGなら, Pである。
3. もしPなら, Cである。
4. しかし, Cでない。
5. それゆえ, Pでない。
6. それゆえ, Gでない。

題についても、やはり、健康その他いろいろの技術の対象となることがらを扱う場合と、同じ態度でいてよいのでしょうか。つまり、何が善であり何が悪であるか、何が美であり、何が醜であるか、何が正しく何が不正であるかといったといったことがらそのものに関する知識なしに、ただ、そうした問題についての説得法だけを工夫して、それによって無知な人々のあいだで、じつは自分はその知識を持っていないのに、識者よりももっと知識があるように見せかけるといふわけなのでしょう。それとも、この場合にはそうした知識が不可欠であって、将来、弁論術を学ぼうとする者は、かならずあらかじめそれを知ったうえで、あなたの門をたたくのでなければならぬのでしょうか。そうでない場合には、弁論術の教師としてのあなたは、入門者に対してそうした知識はなにひとつ授けはしないけれども——それはあなたの仕事ではないわけですから——ただ大勢の人間のなかで、そういったことがらを知らないのに知っていると思われるようにしてやり、実際はすぐれた人間ではないのにすぐれていると思われるようにしてやるのでしょうか。こういった点をどう考えたらよいのでしょうか、ゴルギアス。ゼウスに誓って、さっきあなたが言われたように、弁論術の全貌を明らかにして、その力はいったいどのようなものかを教えてください」(459d-e)

この言葉のなかで、ゴルギアスのもとに正義などの知識を持たない者がやってきた場合のゴルギアスの対応として、次の二通りの選択肢を挙げている³⁾。

(1)正義とは何かを知らないままで、ただ「大勢の人のなかで、そういったことがらを知らないのに知っていると思われるようにしてやり、実際はすぐれた人間ではないのにすぐれていると思われるようにしてやる」

(2)正義の知識をあらかじめ持っていない者には、弁論術を教えない

このソクラテスの質問に対して、ゴルギアスは、ソクラテスの挙げた選択肢とは別の答えを与える。

(3)「よろしい。わたしの思うに、ソクラテス、もし知っていなければ、そうした知識も、このわたしから学ぶことになるであろう」(460a)

³⁾以下の定式化は、Kahnに準拠する(Kahn, 81-82)。

ソクラテスは、このゴルギアスの返答をもとにして、以下のような推論をおこなう (460a-b)。

- (a) 弁論家は、かならず正義の知識を所有している
- (b) 正義の知識を所有する者は、正しい行為を行う
- (c) 弁論家は、弁論術を不正な仕方を使用することはない

一方、ゴルギアスは、これより前に、世間における弁論術の教師に対する悪評から自らを弁護しようとして、もし弁論術を習った者が弁論術を不正な仕方で使用したとしても、その責任は弁論術を実際に不正な仕方を使用した当人にあるのであって、弁論術を教えた者を非難するのは筋違いであるという主張をしていた (456d-457c)。ここで、ソクラテスは、このゴルギアスの主張に言及し、もしこの主張が真実であるならば、ゴルギアスは弁論術の使用法に関して次のような想定をしていなければならないことを指摘する (461a)。

- (d) 弁論術を所有している者 (弁論家) は弁論術を不正な仕方を用いることがありうる

以上のことから、ゴルギアスは、(c)と(d)というふたつの矛盾する命題にコミットしていることが示されたことになる。

II

以上のソクラテスの議論に関して、論者たちは、ソクラテスの推論のなかに含まれる「正しいことを学んだ人は正しい人間である」という命題 (b) の妥当性について疑義を呈してきた⁴⁾。彼らは、プラトンがゴルギアスにこの命題を無批判に受け入れさせているのは不当であり、もしゴルギアスがこの命題を否定していれば、矛盾に陥ることはなかったはずであると主張する。このような批判をする論者たちは、以下のように論じる。ソクラテスは、(b)の命題によって、人は正しいことを知っていれば、必ず、正しい行為を実行すると想定しているように見える。しかし、人がある場面において、ある行為が正しい行為で

⁴⁾ Irwin, 126-29. Cf. Dodds, 218.

あるということを知りながら、それを実行しないで不正な行為を行うことがあるということは、われわれの経験するところである。つまり、正義とは何かを知ること、それを実際に行うことは、別のことであると考えられる。

(b)の命題は、一般に「ソクラテスのパラドクス」と呼ばれるテーゼである。プラトンの読者にとっては、ソクラテスが、徳を技術と類比的に捉える独特の考え方によって、このテーゼを積極的に主張していたということは、周知のことからである。ここの議論においても、(b)の命題は、大工の技術、音楽の技術、医術といった他の技術と正義をアナロジカルに捉えることによって、導入されている(460b)。このことから、ソクラテスが(b)を主張する背後には、徳を技術として捉えるソクラテス独特の考え方が存在していることを見て取ることができる。しかし、ここでは、正義と技術とのあいだにこのようなアナロジーが成り立つことを示すための論証はまったく行われていない。それゆえ、もしゴルギアスが彼の生徒に正義の知識を教えること ((a)) を認めたとしても、(b)を否定することによって、(c)をも否定することができたはずである。この問題を指摘する論者たちは、もしゴルギアスが(b)の不自然さに気がついて適切に対応していれば、ゴルギアスは矛盾に陥ることを避けられたはずであると論じる。

この議論のなかで、ソクラテスが(b)をほかの技術のあいだのアナロジーによって導き出しているということは事実である。その点においてゴルギアスが受け入れそうにない想定を不正に忍び込ませているという批判は妥当なものであろう。しかし、ソクラテスの徳の捉え方の是非を別にして、ここでゴルギアスが(b)を受け入れること自体は不自然ではないと思われる。Kahnの言うように、ここでゴルギアスが「正義を教える」 ((3)の命題) と述べたことの背後には、彼の生徒は正しい者であり、弁論術を不正に用いる者ではないと主張することを強いるプレッシャーが存在する⁵⁾。ゴルギアスの言うように、弁論術の教師はその生徒が弁論術を不正に用いることに責任を負う必要がないとしても、ゴルギアスは、不正であるとわかっている者に、弁論術を教えると言うことはできなかったと思われる。つまり、ここで問題になっているのは、最初から、ゴルギアスは、彼の生徒を正しい者にするのかということなのである。実際、ソクラテスは、(b)のテーゼを形式的に語る以前のゴルギアスに対する最初の質問のなかで、以下のように述べている。

「そうでない場合（相手が正義の知識を持っていない場合）には、弁論術

⁵⁾ Kahn, 82.

の先生としてのあなたは、入門者に対してそうした知識はなにひとつ授けはしないけれども——それはあなたの仕事ではないわけですから——ただ大勢の人間のなかで、そういったことがらを知らないのに知っていると思われるようにしてやり、実際はすぐれた人間ではないのにすぐれていると思われるようにしてやるのでしょうか」(459d)

このソクラテスの言葉のなかでは、正義に関する知識を持った人間と正しい人間(正しいことをする人間)が同一視されていることに注意しなければならない。ソクラテスがここで「ソクラテスのパラドクス」と呼ばれる考え方を念頭に置いて、こういう主張をしているのかどうかということは、問題ではない。重要なのは、ゴルギアスがこのソクラテスの言葉を何の疑問もなく受け入れていることである。このことは、ゴルギアスが正義の知識を教えると言ったとき、それは同時に教える相手を正しい人間にすると考えていたことを示している。そもそも、正義を知らない者に正義の知識を教えた場合、ゴルギアスが教えられた者がその知識にしたがって行動することを期待することはある意味で当然であると思われる。なぜなら、正義の知識は人に行動の規範を与えるという性質を持っているのであり、人はそれぞれの正義の観念にしたがって行動し、不正とみなす行為を遠ざけると考えることは、自然な想定であると思われるからである。

III

もしゴルギアスが「ソクラテスのパラドクス」(b)を受け入れたとするならば、ソクラテスの言うように、ゴルギアスの主張に矛盾が生じることは避けられないのだろうか。わたしは、このソクラテスの議論には、「ソクラテスのパラドクス」の是非は別にして、それとは独立した重大な難点が存在すると考える。それは、ゴルギアスの「正義を教える」という主張(3)にかかわるものである。このあとで、ポロスは、ゴルギアスが矛盾に陥ったのは、正義を教えることを否定することを恥じてそのことを認めてしてしまったことに起因するのであり、正義を教えるという発言はけっしてゴルギアスの本心ではなかったと主張して、この発言を撤回することになる。もし(3)がゴルギアスのほかの主張と相容れないものであるならば、首尾一貫性を保つためには、(3)を放棄されなければならないだろう。そうだとすれば、(3)を主張するゴルギアスの立場から、弁論家には正義の知識は必要ではなく、「ただ正しいと思われさえすれ

ばよい」 ((1)) と主張するポロスの立場への移行はきわめて自然なものとなる。

これまでの論者たちは、ポロスと同じように、(3)を主張することはゴルギアスの主張の内部に実際に不整合を引き起こすということについては異議を唱えることはなかった⁶⁾。しかし、「正義を教える」という主張が、ゴルギアスのほかの主張と実際に矛盾するものであるのかということ、改めて考えてみる必要があると思われる。この主張がゴルギアスの主張のなかにほんとうに矛盾を引き起こすか否かということは、ゴルギアスがこの主張をどのような意味で語っているかにかかっている。わたしは、「正義を教える」というゴルギアスの主張は、それまでにゴルギアスが弁論術に関して語ったこととけっして理論的に矛盾するものではないと考える。

まず注意しておかなければならないのは、ソクラテスがこの矛盾を弁論術のあり方の根本にかかわるゴルギアスの二つの主張に起因するものであると見なしていることである。これよりさきに、ゴルギアスは、弁論術が悪用されることに対して弁論術の教師には責任がないと主張していた(456d-457c)。このことは、あとでソクラテスが指摘するように、ゴルギアスは、弁論術を正しい仕方でも不正な仕方でも使用することのできる価値中立的なものとして捉えていることを意味する。この時点ですでに、ソクラテスは、ゴルギアスの主張のなかに矛盾が生じることを見て取って、次のように語っている。「これはわたしだけの気持ちですが、いまあなたが言われていることは、はじめにあなたが弁論術について言われたことがらとあまり首尾一貫していないし、符合もしていないように思われるからなのです」(457e)。「ゴルギアスが弁論術についてはじめに言ったこと」とは、「弁論術は正義と不正に関する技術である」という主張を指している。われわれが直接に問題にしている460以降のソクラテスの議論は、この二つの主張がはらんでいる矛盾を、ゴルギアスに理解できるように、説き明かしたものにすぎないと考えられる。つまり、ソクラテスがこの矛盾を指摘することによって問題にしていることは、「弁論術は正義と不正にかかわる」という主張と弁論術の価値中立性の主張とのあいだに生じる矛盾である⁷⁾。ゴルギアスの「正義を教える」という主張は、「正義を知らないものが

⁶⁾ Kahnは、ゴルギアスが(3)の立場を採ったことを、たんなる不注意として処理することに疑義を呈している。しかし、彼もまた、(3)を主張することは、ゴルギアスの主張の内部に論理的矛盾を引き起こすと考えている(Kahn, 79-84)。

⁷⁾ 以下のDoddsの要約は、適切である。“the statements of Gorgias which in Socrates’ opinion “do not harmonize” (462a2) are the claim that rhetoric is concerned with right and wrong (454b) and the denial of the teacher’s responsibility (456c-457c).” (220).

やってきたらどのように対応するのか」という質問に対する答えとして述べられたものであるが、ソクラテスにとっては、「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼから必然的に導き出される系なのである。

実際の議論においては、直接に相容れない命題として提示されているのは、「弁論家は、弁論術を不正な仕方を使用することはない」(c)と「弁論術を所有している者(弁論家)は弁論術を不正な仕方を用いることがありうる」(d)という二つの命題である。しかし、この二つの命題はほんとうに矛盾するのだろうか。われわれは、それまでにゴルギアスが弁論術に関して語ったことを念頭に置いて、(c)が導き出されてきた議論をもう一度見直す必要がある。ソクラテスは、実際の議論のなかでは、この命題を次のような仕方語っている。

「そうすると、弁論術を身につけた者は正しい人間であることが必然であり、そして、正義の人として正しいことをことをおこなおうと願うわけですね」(460c)

ゴルギアスは、このソクラテスの問いに同意する。もしここで言われていることが「すべての弁論家は正しい人間である」ということを意味するのであれば、それは、ソクラテスの言うように、(d)の命題と理論的に矛盾することは不可避である。しかし、実際に(c)が導かれた推論から判断するとき、ゴルギアスは(c)をこのような意味で述べているのではなく、ゴルギアスから見れば、それは決して(d)と矛盾するものではないと思われる。

前章で見たように、(c)が語られる直前で、正義の知識と正しい人の関係が、医術などの技術の知識とその技術を身につけた人との関係とのアナロジーによって説明されていた(460b)。このアナロジーの是非は別にして、いまここで注意しなければならないことは、ソクラテスがこのアナロジーによって示そうとしているのは、弁論家と正義の知識の関係ではないということである。もし弁論家と正義の知識のあいだに、医師と医術の知識の関係と同じ関係が成り立つのなら、すべての弁論家は、弁論家である限りにおいて、正義の知識を持つことになる。しかし、このアナロジーが示していることは、「正しいことを学んだ者は正しい人になる」ということ(bの命題)である。(「同じ理屈で」(460b)という表現に注意せよ)。つまり、このアナロジーが働くのは、(b)の命題を導くまでであって、(c)で語られている弁論家と正義の知識との関係には、このアナロジーは当てはまらないのである。(c)は、このアナロジーによって得

られた(b)と、そのまえに語られた「弁論家は正しいことに関する知識を持っている」という命題を組み合わせで引き出された命題である。つまり、ソクラテスが「必然 (ἀναγκάϊον)」と言っているのは、弁論術を身につけた者が正しい人間であるのは定義によって必然であるということではなく、この二つの命題から(c)が導き出されることの理論的必然を指して言われていることである。要するに、この推論のなかでは、弁論術と正義のあいだの内在的な関係は想定されていない。だとすれば、もしゴルギアスがこのアナロジーに同意を与えたとしても、弁論家はすべて正しい人であるというテーゼにコミットしたことにはならないということになる。(b)は全称命題であることは疑いえない。しかし、(c)が全称命題であるかどうかは、ゴルギアスが(3)の命題——「弁論家は正しいことに関する知識を持っている」——ということをどういう意味で捉えていたかにかかっている。

では、ゴルギアスは、弁論術と正義の知識の関係をどのようなものとして提示しているのか？ ゴルギアスの一連の発言は、この二つの知識の独立性をはっきりと示唆していると思われる。(3)は、ソクラテスがゴルギアスの「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」という主張を念頭に置いて、ゴルギアスから引き出したものである。ゴルギアスが「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」と述べたことは事実である。ある論者は、ゴルギアスはこの主張によって弁論術と正義の知識のあいだには内在的なつながりがあることを主張していると解釈している⁸⁾。しかし、そもそも、このテーゼは、ゴルギアスがあらかじめ保持していた彼の積極的な主張ではないことに注意しなければならない。ソクラテスの「弁論術は何に関する技術か」という質問に対して、ゴルギアス

⁸⁾ Halliwell, 228: "Gorgias, *qua* rhetorician, describes himself as possessing 'knowledge about speeches/discourses' (logoi, 449e1, etc.); but when interrogated by Socrates, he finds himself torn between two possible positions: one, that the rhetorician knows how to deploy language persuasively on any and every subject; the other, that his art somehow contains ethical and political principles *within* itself. — In short, Gorgias is suspended between claiming for himself a formal subject-neutral command of logoi, or professing a general wisdom about the nature and working of political societies." (イタリックはHalliwellによる。) Irwin, 117-118: "Gorgias might say that the rhetor is concerned only with the formal elements of the persuasive speech, that he teaches a body of techniques to be applied subjects. Though this reply might have protected Gorgias against some Socratic attacks, it would rob him of central elements of his own conception of rhetoric. He doesn't think it is merely a specialized craft useful someone who also informed about the subject to be discussed. He also thinks a man fully trained in rhetoric will be a good 'speaker', i.e. generally convincing on topics of public interest. Rhetoric is a general education for public life, in Gorgias' view as much as in Isocrates'."

が最初に与えた答えは、「弁論術は言論（ロゴス）に関する技術である」（449d）というものであった。「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」という主張は、ソクラテスがこのゴルギアスの最初の返答を弁論術の規定として不十分であるとして、たとえば医術が病気と健康にかかわる技術であるとするならば、弁論術における医術にとっての病気と健康に該当するものは何かという仕方で質問することによって引き出されたものである（454b）。

そして、ゴルギアスは弁論術は正義と不正だけにかかわる技術であるとは最後まで言っていないことに注意しなければならない。ゴルギアスが弁論術は正義と不正にかかわる技術であると述べたあとで、あらためて、ソクラテスは、国のことに関して弁論術が取り扱うのは、正義と不正に関することがらだけなのか、それ以外のことも取り扱うのかと問うている（455d）。この問いに対して、ゴルギアスは、イエス・ノーという仕方で答えるかわりに、弁論術がその効力を発揮した事例を挙げることによって答えようとする。テミストクレスやペリクレスがアテナイに対して行った造船所、城壁、港などを建設するように提案したことを弁論術の働きとして挙げ、さらに国家の役職の人選についても弁論家は絶大な影響力を及ぼすことができると主張する（455d-456a）。それに続けて、医師であるゴルギアスの弟が病人に対して苦痛を伴う治療をすることを拒んだときに、ゴルギアスが弁論術によってその病人を説得することによって、その治療を受け入れさせたという事例を語っている（456b）。ゴルギアスがこれらの例を挙げることによって示そうとしていることは、弁論術は国家のことに限らずあらゆる局面において、あらゆる論題を論じてその効果を発揮するものであるということである⁹⁾。

さらに、ゴルギアスは、弁論術を不正に使用する者があったとしても、その者に弁論術を教えた教師には責任はないということを、自分の持ち前の主張として積極的に主張していた。このことは、人は、その者が正しい者であるか不正な者であるかにかかわりなく、人は弁論術を身につけることができるとゴルギアスが想定していたことを示している。もし正義の知識と弁論術の知識が独

⁹⁾ 引用した459d-eのソクラテスの言葉を見れば、ソクラテスも、弁論術が扱う論題は、正義や不正にかかわることがらに限られないというゴルギアスの主張を受け入れたうえで、議論を進めていることがわかる。ソクラテスの意図から見ても、ただ弁論術が正義と不正にかかわることがらを論題にするという事実を引き出せば十分だったのであり、弁論術と正義に不正にかかわることがらだけを扱うものであるのか否かということ自体は問題にはならないのである。なぜなら、彼が問題視するのは、弁論家が正確な知識を持つことなしに、人間にとって最大の重大事である正義と不正にかかわることがらを論じ、人々に大きな影響力を行使しているという事実であるからである。

立したものでなければ、ゴルギアスは、不正な仕方でも弁論術を使用する者が存在するということを認めることはできなかったであろう。

以上のことはすべて、ゴルギアスが弁論術と正義の知識は独立したものとして捉えていることを指し示している。その反対に、ゴルギアスの言葉のなかに、弁論術と正義の知識のあいだに内在的関係があることを示唆する内容を見いだすことはできない。

ソフィストと呼ばれる者たちが「徳を教える」ことを公約としていたことが知られている。もしゴルギアスをソフィストと見なしてよいならば、彼の生徒たちに弁論術を教えることと、正義を教えるという主張のあいだには、何らかの強い関係があると想像されるかもしれない¹⁰⁾。しかし、ゴルギアスという人物について、ほかのソフィストたちとはちがって、彼が徳を教えることを積極的に否定していたことを思い出されてもよい。『メノン』のなかで、ゴルギアスが徳を教えると主張するほかのソフィストたちを嘲笑し、自分の生徒をただ「弁論術にすぐれた者」にすると主張していたことが報告されている¹¹⁾。ここからわかることは、弁論術と徳を切り離し、前者だけを前面に押し出そうとするゴルギアスのスタンスである。

では、ゴルギアスはどういう意味で「弁論術は正義と不正にかかわる」と言ったのだろうか？この主張は、弁論術は、ことがらの正義と不正が問題にされる裁判や集会において、もっともよく使用され、その効果がもっとも顕著に発揮されるという経験的事実にもとづくものであると考えられる¹²⁾。しかし、ゴルギアスにとって、これらのことがらは弁論術が取り扱う論題の一つにすぎない

¹⁰⁾ 拙論「ゴルギアスはソフィストか」参照

¹¹⁾ *Meno* 95. ある論者たちは、ゴルギアスが徳を教えることをしていたという『メノン』のなかの報告と、『ゴルギアス』において正義を教えるという主張を折り合わせようとしている (Dodds, 212, Irwin)。しかし、『ゴルギアス』のなかでゴルギアスが正義を教えると言っていることは、ポロスの指摘するように、ゴルギアスの本心であると考えする必要はなく、彼はこの主張にコミットしないと考えることによって矛盾は解決する。むしろ問題は、歴史的ゴルギアスが正義を教えることを否定するを実際に恥じたかどうかということも疑わしいという点にあるだろう。というのは、彼は、徳を教えないということ、自分をほかのソフィストたちを区別するための彼の商業的政策として公言していたのであり、ソクラテスを相手にした場合でも、正義を教えることを否定することを恥ずかしく思うということは考えにくいからである (contra Kahn, 82-83)。ここでゴルギアスが正義を教えることを否定することを恥ずかしく感じたことは、そう感じさせることによってゴルギアスに矛盾に陥らせる主張をさせて、ポロスの主張への移行を可能にするためのプラトンによるドラマツルギー上の工夫であると考えられるべきであろう。

¹²⁾ Cf. *Phdr.* 261a-b.

のであって、弁論術と正義のあいだには、医術と健康とのあいだに想定されるような内在的な繋がりには存在しない。ソクラテスとの問答においては「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼは医術と健康とのあいだの関係とのアナロジーから引きだされたものであるにもかかわらず、実際には、弁論術と正義のあいだの関係と医術と健康のあいだの関係には正確なアナロジーは成り立っていないことがわかる。ゴルギアスにとって、弁論術は、いかなる論題にも適応可能な形式的な技術なのである。言い換えれば、ゴルギアスは、彼が弁論術の規定として最初に述べた「弁論術は言論にかかわる技術である」テーゼを一貫して保持していると考えられる。

以上に見てきたことがらは、ゴルギアスにとって、弁論術と正義の知識を独立したものであり、この二つの知識は、その両方を同時にでも、どちらか一方だけでも、所有することが可能な知識であることを示している。このことを念頭に置いて、もう一度、ソクラテスの議論を見てみることにする。(a)の「弁論家は、正義についての知識を持つ」という命題は、もしゴルギアスのもとに正義に関する知識をもたない者がやってきた場合には、正義に関する知識も授けるといふゴルギアスの返答から導かれた命題であった。(a)が導かれる会話は以下の如くである。

ソクラテス「これはありがたい、よく言ってくださいました。そうすると、いやしくもあなたが誰かを一人前の弁論家に仕立てた場合に、その人は、正しいことと不正なことの何たるかをかならず知っているはずなのですね。前から知っていたにせよ、後になってあなたから学んだにせよ」
 ゴルギアス「そうだ」(460b)

ここでわざわざ「いやしくもあなたは (ov)」と主語が強調されていることは、注意されてよい。ここで言われていることは、ゴルギアスは自分の生徒に正義の知識を与えるということであり、ゴルギアス以外のすべての弁論術の教師が正義を教えるということはどこでも言われていない。だとすれば、もし正義に関する知識をもたない者が弁論術を習う場合、たまたまゴルギアスのもとに生徒入りすれば、ゴルギアスからその正しい使用法も指導されるであろうが、ほかの弁論術の教師についた場合には、弁論術の使用法まで指導されるという保証はないことになる。正義とは何かということについて無知なままで弁論術の知識だけを与えられた者は、正義に関する知識をもたないために、不正な仕方でも弁論術を使用するかもしれない。要するに、(a)のなかで言われている弁論家

とは、すべての弁論家を指すのではなく、ゴルギアスによって教育された者のような、弁論術のほかに正義の知識を身につけた弁論家に限られると考えなければならない。言い換えれば、弁論家には、正義の知識を身につけた弁論家とそうでない弁論家がいるのであり、前者は弁論術を正しい方法で使用するであろうが、後者は不正な仕方を使用するかもしれない。つまり、弁論術が正しく使われるか否かは、その所有者の正義の知識にかかっているのである。

そして、ゴルギアスは、弁論術が正しい仕方で行われるべきものであることを明確に主張していることにも注意されなければならない。ゴルギアスは、弁論術を不正に使用する者があったとしても、その者に弁論術を教えた者には責任がないということを主張する議論のなかで、「弁論家は、あらゆる人々を相手にあらゆることがらを論じる能力をもち、要するに、大衆のなかでは何を論題として選ぶとも、誰より説得力をもつことができる。しかしながら、だからといって如何にそうするだけの能力があるからといって、医者たちに対しても、他の専門家たちに対しても、みだりにその名誉を奪うようなことをしてはならないのだ。弁論術もやはり、競技の場合にもそうであったのとまったく同様に、あくまで正しく用いなければならない」と語り、もし弁論術を不正な仕方で行う者があったとすれば、憎もうと、追放しようと、死刑にしようと差し支えない、とまで語っている(457b-c)。つまり、ゴルギアスは、公式見解としては、弁論術は正しい仕方でも不正な仕方でも使用することができるものであるが、その使用法はつねに正義によって支配されなければならないと主張しているのである。

もし(a)が、

(a') すべての弁論家は、弁論術のほかに、正義についての知識を持つ

という意味であるならば、(ゴルギアスが(b)を認めるとして) (b)を介して

(c') すべての弁論家は、弁論術を不正な仕方で行うことはない

が必然的に帰結する。(c')は、ゴルギアスの持ち前の主張である「弁論家は弁論術を不正な仕方で行うことがある」（(d)）と矛盾する。ソクラテスがゴルギアスの主張のなかに矛盾があると断じるのは、ゴルギアスに(a')—(b)—(c')の推論を帰することによってである。ソクラテスが(a')を引き出すことができるのは、「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼに対して非

常に強い負荷を加えることによってである。ソクラテスは、このテーゼが真であるならば、弁論術と正義とのあいだには、医術と健康のあいだにおけるような関係が成り立たなくてはならないのであり、医術が健康に関する知識をもたらすように、弁論術はそれ自身によって正義に関する知識をもたらすものでなければならぬと考えている。彼は、「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼをこのような仕方で理解したからこそ、ゴルギアスがこのテーゼを主張した時点で、ゴルギアスの主張のなかに矛盾が生じることを予想することができたのである(457e)。つまり、ソクラテスにとっては、弁論術は正義と不正に関する技術であるならば、必然的に、すべての弁論家は正しい人間でなければならぬのである。このように考えるとき、ソクラテスから見れば、最初のソクラテスの質問に対する(1)、(2)、(3)の選択肢はけっしてオープンなものではなく、ゴルギアスは「弁論術は正義と不正に関する技術である」という主張を、ソクラテスのような仕方で理解していなかったし、そうする必要もない。要するに、(a)から(c)への推論は、ゴルギアスとソクラテスそれぞれの「弁論術は正義と不正にかかわる技術である」というテーゼの理解の仕方にもとづいて、ゴルギアスとソクラテスのあいだで異なった仕方で理解されながら、並行的に進んでいる推論であると見なすことができる。

IV

ポロスは、このあとで、ゴルギアスが正義を教えると主張したのは、彼の本心ではなかったと主張する。しかし、われわれは、ゴルギアスが本気でこの主張をしたのかということと、この主張がゴルギアスのなかに理論的矛盾を引き起こすかということとを、別けて考えなければならない。ゴルギアスが正義を教えるということを本気で主張していたのではないということは、ほんとうのことであろう。まず、正義を教えるというゴルギアスの主張は、ソクラテスの「正義に関する知識を教えるのか」という質問に対する答えとして、反射的に語られたものにすぎないという印象を与える。さらに、さきに述べたように、ゴルギアスが彼の生徒たちに正義の知識を教えるという活動を意識的に行っていたとは考えにくい。そして何よりも、ここに至るまでに、ゴルギアスがソクラテスに対して弁論術の効用として述べていることは、彼が実際に弁論術を使用する際の姿勢は、相手をただ説得すればよいというものであったことを示唆している。ゴルギアスは、弁論術の作りだすものは何かとたずねられて、「人間にかかわりのあることがらのなかでも最高にして、最善のもの」

(451d) と答えたいうえで、その内容を、自分自身に自由をもたらし、自分の住んでいる国において他人を自由に自分のために支配することと説明している(452d-e)。つまり、ゴルギアスが弁論術の最大の効用として念頭に置いていることは、現実のパワー・ポリティクスの世界で、弁論術は最高の武器として役立つということにほかならない。ゴルギアスの弁論術に対するこのような説明は、彼がただ相手を説得すればよいという態度で弁論術が用いられることを、暗黙のうちに認めていることを示している¹³⁾。

このようなゴルギアスの発言を念頭に置くとき、彼は、「正義を教えるのか」というソクラテスの質問に対して、(3)ではなく、(1)を採らなければならなかったと考えられる。しかし、ここで大切なことは、(3)を認めることはゴルギアスの本心ではないということと、(3)が論理的な矛盾を引き起こすということとは、別のことであるということである。ソクラテスの指摘する矛盾が真の矛盾であるかということは、ゴルギアスが(3)にコミットしているのかしていないかということから独立して、考えなければならない問題なのである。これまでの考察が正しければ、弁論術と正義の知識の関係に関するゴルギアスの基本的な考え方は、弁論術の知識と正義の知識は独立して成立するものであり、弁論術の使用法は、正義の知識によって支配されるべきであるというものである。もしこの二つの知識が独立したものだとするれば、ゴルギアスは、弁論術のほかに、正義を教えるということも、教えないということも、理論的に矛盾することなく主張することができるはずである。だとすれば、(3)の立場をとることが必ずしも矛盾を引き起こすことにはならないということだけでなく、たとえば、正義の価値を認めつつ、正義を教えないと主張することも、可能であることになる。

(これは(2)の立場である。) 言い換えれば、ゴルギアスにとっては、(1)・(2)・(3)の選択肢は、理論的にはどれも平等に開かれた選択肢なのである。このあと、ポロスが、正義を教えるという主張を撤回して、そのまま、正義の知識は必要ではないという立場を採ることになる。弁論術がはらんでいる反道徳性を暴き

¹³⁾このような弁論術の効用を語るときのゴルギアスの誇らしげで楽天的な調子は、それが正義や真理に逆らう方向を持ったものであることにまったく気がついていないように見える。彼がこのことに気がつかなかった理由は、このような仕方で弁論術を使用することによって社会的な野心を満たすことが、世間一般で認められている正義の概念と直接的に齟齬するものではなかったからであると思われる。政治的な実力者の座につくことは、積極的にその価値を認められる徳性(ἀρετή)の一つであり、それを実現するために弁論術を使用することを反道徳的なことと見なす必要はなかったのであろう。わたしは、ゴルギアスが、ソクラテスの質問に対して、簡単に「正義を教える」と答えることができたのも、このような事実起因していると考えられる。

だすことを眼目とする『ゴルギアス』の弁論術批判にとっては、その根幹にかかわる決定的な移行であると言うことができる。しかし、この二つの主張には理論的ギャップがあり、この移行はけっして必然的なものではないのである。

ゴルギアスに矛盾があるとすれば、それは理論的な矛盾ではなく、彼が公言していることと、彼の実際の行為とのあいだの矛盾である。彼が弁論術の効用として語っている、他人を支配して思い通りに支配するということは、論じられていることがらの正・不正や顧慮することなくただ相手を説得すればよいという姿勢を必然的に伴うであろう。つまり、ゴルギアスのこのような主張から見れば、ゴルギアスは、弁論術の使用に際しては正義の知識は不必要であるという立場に立っていると考えられる。このことは、彼は、口では、弁論術の不正な使用法は認められないと語りながら、実際には、不正に使われる可能性があることを承知の上で、あるいはそれを奨励しながら、弁論術を教えているということを意味する¹⁴⁾。このような立場は、ポロスやカリクレスの唱える反道徳的立場へとストレートにつながるものであり、その意味において、ポロスは、ゴルギアスの立場を正当に引き継いでいると言うことができる。すなわち、ソクラテスの主張からポロスの主張への移行は、理論的要請としての移行ではなく、弁論術を実際に使う者の、いわば建て前から本音への移行である。しかし、ゴルギアスが実際にどのような仕方で弁論術を使用していたかということをして別にして、彼は、弁論術というもののあり方を、その「理念型」としては、矛盾なく提示していると考えられる。そうだとすれば、ソクラテスがゴルギアスの主張から矛盾を引き出す議論は、ゴルギアスの主張の理論的困難を指摘するものではなく、ゴルギアスやポロスなどの弁論術を実際に使用する者の本音を吐かせるためのトラップの役割を果たすものであると言われなければならないであろう。

(京都大学文学部・研修員)

文献表

Dodds, E.R., *Plato Gorgias* (Oxford, 1959).

¹⁴⁾ Kahnもまた、ゴルギアスの矛盾を、理論的な矛盾ではなく、理論と実際の行為とのあいだにおける矛盾であると見ている。しかし、彼もまた、(3)を主張することが理論的矛盾を引き起こし、(1)を選択することによってのみ首尾一貫性が保たれると考える点において、伝統的な解釈に与する(84)。

Guthrie, W. K. C., *History of Greek Philosophy*, Vol. iv (Cambridge 1975).

Halliwel, S., "Philosophy and Rhetoric" in I. Worthington ed. *Persuasion: Greek Rhetoric in Action* (London 1994), 222-243.

Irwin, T., *Plato, Gorgias* (Oxford 1979).

Kahn, C.H., "Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*", *Oxford Classical Study* 1 (1983), 75-121 .

木下昌巳, 「ゴルギアスはソフィストか」 『古代哲学研究室紀要・Hypothesis』 5 (1995), 1-20.

本文中の『ゴルギアス』の翻訳は、田中美知太郎編『プラトンI 世界の名著6』（中央公論社、1978）所収の藤澤令夫先生による翻訳を、若干、手を加えて使用させていただいた。